

ハコベハナバエによるハウレンソウ被害の発生について

ハコベハナバエの寄生によるハウレンソウの被害が、県内で初めて確認されました。

幼虫が葉肉や生長点付近の若い組織を食害し、葉の萎ちょう・黄化や株の芯止まり・枯死を引き起こします。

特殊報：新奇な有害動植物を発見した場合及び重要な有害動植物の発消長に特異な現象が認められた場合に発表するものです。

1 病害虫名 ハコベハナバエ *Delia echinata* (Séguy)

2 発生経過

- (1) 平成21年11月中旬、県西部地域の露地栽培ハウレンソウにおいて、ハエ類の幼虫が葉に食入する被害が見られた。寄生していた幼虫を採集し、羽化させた成虫を横浜植物防疫所に同定を依頼したところ、ハコベハナバエであることが判明した。
- (2) 本虫は主にナデシコ科植物を寄主とし、ハウレンソウの被害は本県では初めて確認された。国内におけるハウレンソウの被害は、北日本で1960年代に報告されているが、それ以外の地域では平成19年度に神奈川県で初めて確認され、現在までに東京都及び奈良県で特殊報が発表されている。

3 形態及び生態

(1) 形態

成虫は体長6~7mmで、胸・腹部は灰黄色粉で覆われた黒色、幼虫は淡黄緑色で老熟期には体長6mm程度となる。蛹は体長5mm程度で、赤褐色の俵状である。



成虫(体長6~7mm)



幼虫(体長約6mm)



蛹(体長約5mm)

(2) 生態

詳細な生態は未解明であるが、近縁のタネバエと同様の発生経過をたどってい

るものと推定され、年3世代以上を繰り返すと考えられる。老熟幼虫は加害部から脱出して土中で蛹化し、約2週間で羽化して成虫となる。

4 被害

葉の先端の裏側に点々と産卵し、幼虫はハモグリバエのように葉肉部に食入して潜孔を形成する。潜孔痕はふ化直後の細い線状だが、その後幼虫が発育するにしたがって広く葉肉を食害し、袋状となる。更に葉柄に食入したり、近くの葉へ移動して食害を続ける。

被害を受けた葉は、潜孔部から萎ちょう・黄化する。成長点付近の若い組織が食害された場合は芯止まりとなり、株が枯死することもある。



被害葉



新葉の被害

5 防除対策

- (1) 現在のところ本虫に対する登録薬剤はないので、防虫ネット被覆による防除に努める。
- (2) 早期発見に努め、幼虫が生存する被害葉を摘除して幼虫を圧殺する。
- (3) ハコベ、オランダミミナグサなどのナデシコ科雑草に寄生が見られるため、ほ場周辺の雑草除去に努める。